

# 「かわいい」存在がもたらす感覚の変容

－何がそんなに「かわいい」のか－

村松 里彩

今日では、「かわいい」は非常に身近な存在になっており、何に対して使用してもいささか問題はない。本論文では、「かわいい」の対象を人に絞り、アイコン的存在と近い存在に向けられる「かわいい」に違いが存在しているのかについて検討し、「かわいい」という言葉を人々がどのように捉え、使用しているのかについて明らかにすることを目的とする。

先行研究から、「かわいい」の語源やどのようにして展開されてきたのかが既にわかっている。「かわいい」が、幼児に対する愛情から保護したいという、ポジティブな感情へと変容させる形容詞であり、対象と接することで感情として想起され、相反する「弱さ」と結びつけられることが多いという。女性オタクたちの「萌え」語りの間で「かわいい」が頻繁に登場し、「かわいい」と「萌え」が密接に関わっていることも明らかになっている。

しかし、対象によって向けられる「かわいい」に違いが存在しているのか、そもそも「かわいい」とは何なのかについては捉えられていない。そこで、筆者はその点に焦点を当て、女性オタクを中心に「かわいい」に関するアンケートを行った。アンケートは全 19 項目であり、計 52 件の回答があった。

その結果、近い存在への「かわいい」は外見から判断できるものが多く、アイコン的存在への「かわいい」は、具体的な行動や周囲との関わりに関するものが多いことがわかった。また、実際に使用する場面では、対象ごとに明確な使い分けがあるわけではなかった。「かわいい」と思う基準があっても、そのまま使用することも限らず、対象を見て、その場で判断した「かわいい」を伝えているのではないかと考える。

「かわいい」という言葉そのものに対しては、多くの人は肯定的に捉えており、汎用性が高いと考えていることがわかった。「かわいい」以外の表現をするときには「好き」といった好感を表す言葉や表記の違う言葉にも代替できた。「かわいい」は、複数の意味が加わり、1 つの決まった表現にとどまらず、ポジティブな感情表現として、より万能な言葉として人々に根付いているのだろう。

今後、「かわいい」存在に使用していく中で、「かわいい」を使用する感覚に更なる変化が起こるのか、「かわいい」に代わる言葉が台頭してくる可能性があるのかについて注目していく。